

北海道から 青森県へ

氏名 工藤 多華子

北海道小樽市立桂岡小学校 → 青森県弘前市立東小学校
(期間：平成28年4月1日～平成30年3月31日)

1 派遣先の学力向上等の取組

1. よくわかる授業づくりの推進（板書計画の提出・ICT機器の活用）

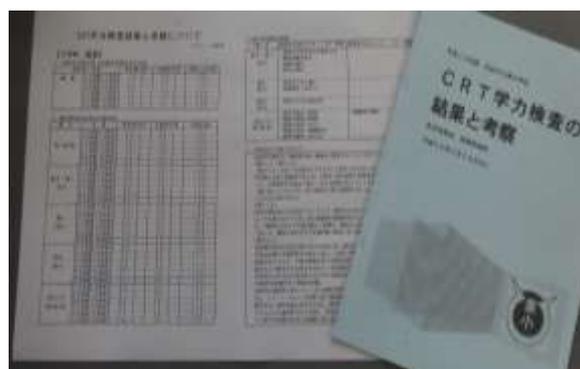
- ・弘前市では、教育委員会による学校訪問時に、各学校が板書計画を提出している。日々よく分かる授業づくりのため、ねらいを明確にして学習に取り組み、まとめや振り返りが着実にされるよう個に応じた学習指導や学習習慣の改善に努めている。



- ・弘前式 ICT 活用教育推進事業により、「実物投影機」「電子黒板機能付きプロジェクター」「タブレット PC」を全校に配備する計画が進められている。実物投影機は全クラスに、電子黒板機能付きプロジェクターは学年に1台ずつ配備されている。タブレットが学級児童相当分(40台程度)あり、計算アプリや地図アプリを使用したり、修学旅行の自主研修や様々な教科でカメラ機能を使ったりと、効果的に学習に生かされている。

2. 標準学力検査結果分析（R-PDCA サイクルで組織的な検証改善）

- ・県独自の学力調査(第5学年で実施)や全国学力・学習状況調査に臨む前に、事前に過去の問題等に取り組み、児童が安心して学力調査に臨められるように配慮している。
- ・知能検査とNRT学力検査やCRT学力検査をリンクさせ、アンダーアチーバー・オーバーアチーバーの確認をし、個に応じた手立てを職員全体で共有している。6年間の得点率を分析し、担任が替わっても一貫した指導を行うことができるようにしている。



CRT学力検査結果と考察について

【6学年 国語】

1. 学年平均得点率と全国平均得点率の比較

学年・比較	学年得点率	全国得点率	全国との比較
4年度(1学年)		79.3	
5年度(2学年)		78.7	
6年度(3学年)		71.9	
7年度(4学年)		70.0	
8年度(5学年)		67.0	
9年度(6学年)		71.5	

R:標準学力検査による学習の成果と課題の把握
知能検査との相関によりアンダーアチーバー・オーバーアチーバーの確認

P:学力向上プランにより自校の強みや弱みの把握、数値目標の設定

D:検査分析に基づく授業改善

C:プラン検証報告による改善点、対応策の検討

A:次年度への取組の反映

3. 習熟度別指導の充実（算数）

- ・習熟度別指導については、その学年の実態にあった形態で取り組んでいる。担当学年は、学年で算数の時間を合わせ、担任2名+TT の計3名で、授業の進め方によって3つのクラスに分けて指導していた。「発展コース」は教科書を素早く終わらせ応用問題にたくさん触れ、「標準コース」は教科書を隅々まで丁寧に扱い、「基本コース」は教科書の基本問題を重点的に行っている。たくさんの問題に挑戦したい児童、苦手意識がありじっくり学びたい児童など、それぞれのニーズに合わせて安心して授業に臨めるよう工夫している。

4. 義務教育9年間を貫く学びと育ちの環境づくり

- ・中学校区ごとに実施される小中一貫教育の導入に向けた研修会を通して教職員の小中一貫教育に関する意識が高まっている。

5. 学校・家庭・地域が支える環境づくり（各種作品展への出品・参加）

- ・作文や詩、版画、写生、家庭科作品、市内小学校連合体育大会など、学習の成果を他校と交流できる場がたくさん設けられている。児童はもちろん、教員側も、毎年質の高い表現ができるよう意識して取り組んでいる。

2 北海道に戻って実践したいこと

○ ICT機器の有効利用による授業改善

- ・各クラスに1台配備されている実物投影機について、効果的に活用し、授業改善につなげる。

○ 家庭等の連携（家庭学習の充実）

- ・家庭で取り組みやすいように家庭学習の仕方を提示したり、保護者にも協力を依頼したりすることで、誰もが毎日少なくとも「10分×学年+10分」を維持できるようにする。
- ・学習だけでなく、生活の仕方や学習用具の準備等も保護者に協力してもらえよう、発信する。



○ インクルーシブ教育の充実

- ・見通しをもたせる工夫 視覚化の工夫
- ・板書と机間指導の工夫 注目しやすい分かりやすい状況を工夫
- ・話し方の工夫 安心感をもたせられるような質問、話し方をする
- ・視覚化、動作化の工夫 注意、集中を促す工夫
- ・個の特性に合わせた課題、学習形態の工夫 保護者との連携・理解・協力
- ・学び合いの工夫 考える視点、話し合う視点、書く視点を明確に伝える
学習のルール、学級のルール